



- 高等学校等における ICTの活用促進
- 学校種間連携の強化
- 英語担当教師及び小学校教師の指導力・英語力の向上

## 当該地域における英語教育の課題

### ① 中学生・高校生の英語力について 国が求める英語力(高3:CEFR A2以上、中3:CEFR A1以上)を有する生徒の割合(%)政令市除く

- ▶ 中学校においては、年々上昇しているが、目標値を達成できていない。
- ▶ 高等学校においても、年々上昇し、令和3年度には国の目標値である50%を超えた。

	中学3年生			高校3年生		
	R1	R3	R4	R1	R3	R4
目標値	50	50	50	50	50	50
実績値	46.9	47.4	49.1	43.7	50.2	51.0

「大阪版CAN-DOリスト」を活用した取組み等により、英語力を見とる基準は一定共有できたものの、中学生の英語力が目標値に達していない状況については、言語活動や、パフォーマンステストにおける問題設定の質について、まだ学校間や教員間で差があることが要因の一つと考えられる。

### ② パフォーマンステストの実施について (1校あたりの年間平均実施回数)政令市除く

- ▶ 中学校においてはスピーキングの回数が年々増加傾向であるが、R4はライティングが減少した。
- ▶ 高等学校のスピーキングテストでは、英語コミュニケーション I での実施回数が大きく上昇した。
- ▶ 児童生徒の英語力向上に資する上では、パフォーマンステストの回数を単に増加させるだけでなく、実施内容やその評価についての質的な改善がさらに必要である。

	スピーキング			ライティング		
	R1	R3	R4	R1	R3	R4
中学校						
全学年計	11.5	13.8	15.3	10.4	13.1	12.0
高等学校						
英語コミュニケーション I	2.5	2.2	3.8	0.8	0.5	2.5
コミュニケーション英語 II	2.0	1.6	2.2	1.0	0.5	2.1
コミュニケーション英語 III	0.8	1.0	1.3	0.8	0.5	1.5
英語表現 I (聴き取り)	1.3	1.0	2.3	1.2	0.7	3.0
英語表現 II	1.0	1.1	0.8	1.7	1.5	2.5

効果的なICTの活用事例を共有するとともに、「STEPS in OSAKA」の問題について、状況や場面などの設定のバリエーションを増やしたり、思考を働かせることのできる問いの質を改善したりしていく必要がある。

### ③ 英語授業におけるICT機器の効果的な活用について政令市除く

- ▶ 「児童生徒がパソコン等を用いて発表や話すことにおけるやり取りをする活動」や「児童生徒による、発話や発音などの録音・録画」については、授業における活用率25%未満の学校の割合がどの校種においても高く、ICT機器の機能をいかした活用をしていない学校が一定数あることがわかる。

児童生徒がパソコン等を用いて発表や話すことにおけるやり取りをする活動	小学校	中学校	高等学校
授業における活用率25%未満の学校	26.0 %	33.7 %	42.7 %
児童生徒による、発話や発音などの録音・録画	小学校	中学校	高等学校
授業における活用率25%未満の学校	55.0 %	59.0 %	67.3 %

(R4)

課題の要因としては、ICT機器を活用して生徒が自分の発話などを確認する等の効果的な活用方法が浸透していないことや、1人1台端末の機能を有効に活用した授業づくりの工夫が共有できていないのではないかと考えられる。

【出典】R4英語教育実施状況調査：本府

## <実施内容>

### ● 「STEPS in OSAKA」「BASE in OSAKA」等 ICTを効果的に活用した実践事例の普及・発信

大阪府では、MEXCBTに問題を搭載している英語学習ツール「STEPS in OSAKA」と、AIによる自動採点機能を有した英語学習アプリ「BASE in OSAKA」を開発し、英語における個別最適な学びの実現に向けて、ICTを活用した取組みを進めてきた。本事業においては、特にICTを効果的に活用した実践事例等を普及・発信することで、府域の英語教育の推進を図った。



↑ BASE in OSAKAとSTEPS in OSAKAの活用イメージ

### ◆ 「STEPS in OSAKA」をベースとした効果的なICT活用促進【小中高】 (課題①～③)

#### ○ STEPS in OSAKA活用ワーキンググループ会議の設置

「STEPS in OSAKA」の新規問題作成のために必要な検討、協議を重ね新規問題を250問作成した。また、R4作成済み問題について、学習者が自己の回答をふり返る際に、よりふり返りがしやすいようにブラッシュアップさせ、MEXCBT上に公開した。

#### ○ STEPS in OSAKA活用WG調査研究校

調査研究校の公開授業を実施し、授業実践を広く発信した。また、「英語教育Webフォーラム」等において実践報告を行い、調査研究校における研究成果について府内へ普及・発信を図った。

#### ○ WG運営検討会議の実施 (年2回)

活用WG会議や調査研究校の取組みについての報告や情報交換を行い、検討会議メンバーが進捗状況等を適切に把握することができるよう努めた。また、学識経験者からの助言や評価を受けることで、方向性を確認しながら事業を進めた。



## ◆ リーダー教員を活用した授業の質的向上【小・中】（課題①～③）

○これまで育成してきた、小中学校の英語教育の実践リーダーを活用して、府教育庁で実施する研修や連絡会において効果的なICT活用事例を共有するとともに、各市町村ですべての学校への伝達や普及を行った。

○市町村におけるリーダー教員を活用した授業の質的な向上に向けて、市町村での研修や連絡会での活用方針、加配教員との連携について指導助言を行った。

◀実施した主な研修・連絡会▶

- ・中学校英語コーディネーター連絡会（全3回）…各市町村の英語教育に係る実践や好事例を共有した。  
講義…「学習指導要領を踏まえた英語の授業づくり」「全国学力・学習状況調査の結果」等について  
グループ協議…「各学校における授業実践」「パフォーマンステストづくり」「市町村指導主事と連携した取組み」等について
- ・小学校英語担当専科教員連絡会（全2回）…各小中学校の英語教育に係る実践や好事例を共有した。  
講義…「小学校英語専科指導教員の役割」「小・中学校の外国語教育の現状や施策」等について  
グループ協議…「ALTと一緒に授業づくり」「パフォーマンステストや言語活動事例」等について

## ◆ 「学習指導要領の趣旨等の周知」【高】（課題①②）

○学習指導要領の趣旨や大阪府の英語教育に係る施策、好事例を全府立高等学校に共有することで、英語教育改善及び充実を図った。

◀実施した主な研修・連絡会▶

- ・大阪府教育課程協議会…内容 学習指導要領の趣旨や内容を踏まえた授業や評価の在り方に関する講義  
CAN-DOリストやシラバスの作成に関する講義・演習、効果的な実践事例(中学校の実践を含む)の紹介

## <成果指標に基づく成果及び検証>

### ◆ 課題①に対する成果検証

中3の英語力については、R5の府の目標値52%には未達ながら、51.2%と50%をこえた。高3は昨年度に引き続き目標値を達成した。府として「大阪版CAN-DOリスト」を、小・中・高を通じた4技能5領域の総合的な向上をめざす英語力の指標として作成し、各研修、連絡会において示すとともに、各市町村や学校における今年度の取組み等についての情報交換や協議を通して、各市町村及び学校における授業改善や英語教育推進に係る取組みの充実を図ってきた。

これらの取組みにより、生徒の英語力がCEFR-Jでどのレベル相当にあるのかを見とる基準の一つとして共有できた結果、生徒の英語力を適正に評価し、生徒の課題に対応した個に応じた支援ができたと考えられる。

高3:CEFR A2以上、中3:CEFR A1以上を有する生徒の割合

	中3（政令市除く）		高3	
	R4	R5	R4	R5
目標値	50%	52%	50%	52%
実績値	49.1%	51.2%	50.8%※	56.1%※

※政令指定都市の値を含む

### ◆ 課題②に対する成果検証

中学校では、英語コーディネーター連絡会において、パフォーマンステストづくりについて協議し、実践交流を行った。また、高等学校では、「スピーキング力測定ツール」等を用いて、府立学校におけるスピーキングテストの実施を促進を図った。あわせて、英語教育Webフォーラムにおいて、調査研究校の小中高におけるパフォーマンステストの実践事例等を広く発信した。これらの取組みも一因となり、府内学校におけるパフォーマンステスト（特にスピーキング）の実施回数の向上につながったと考えられる。

1校あたりの年間平均実施回数（単位：回）

中学校 (政令市除く)	スピーキング		ライティング	
	R4	R5	R4	R5
全学年計	15.3	17.6	12.1	13.1
高等学校	スピーキング		ライティング	
	R4	R5	R4	R5
英コミI	3.8	3.9	2.5	1.4

児童生徒が1人1台端末・パソコン等を用いて発表や話すことにおけるやり取りをする活動授業における活用率25%未満の学校

### ◆ 課題③に対する成果検証

これまでの取組み等により、府内学校においては、授業におけるICTの活用が進んできている。今後は、発信力強化につながる英語学習になるように、さらに言語活動の質を向上させる必要がある。

	小学校	中学校	高等学校
R4	26.0%	33.7%	42.7%
R5	21.2%	26.0%	35.3%

## <今後の方向性>

### ◆ 課題①②③に対して⇒ デジタル技術の効果的な活用の在り方等に関する実証研究の推進

府が独自にパッケージ開発を進めているデジタル英語学習ツール「BASE in OSAKA」や「STEPS in OSAKA」等により、AI等のデジタル技術の活用が、児童生徒の発信力や意欲の向上にどのようにつながるかについて、活用方法・状況とパフォーマンステストの結果との関連性や、児童生徒アンケート等から分析・検証する。あわせて、言語活動及び言語活動を通じた指導の充実につながるよう、デジタル技術の効果的な活用の在り方等に関する教員の指導についても検証していく。

【来年度めざすゴール】 <数値目標>

- ①児童生徒の発信力強化⇒生徒英語力 中:54%(CEFR A1・英検3級程度以上) 高:57%(CEFR A2・英検準2級程度以上)
- ②パフォーマンステストの質と実施率の向上⇒スピーキングテストとライティングテストを両方実施する学校の割合 中:100% 高:50%

デジタル学習ツールの活用による客観的な評価を基に、日々の授業での教科書を使った指導方法の改善、ALTとのコミュニケーションをより積極的に行う授業づくり等、より個や集団の状況に応じた指導につなげていくことをめざす。

## 成果普及

▶ 「STEPS in OSAKA」リーフレット（大阪版CAN-DOリスト）

<http://www.pref.osaka.lg.jp/shochugakko/r04english/>

府教育庁HPに掲載中→



「STEPS in OSAKA」問題 ※MEXCBTより問題検索、学習eポータルへのテスト登録が可能